



## 病氣と向き合って

中山 美和子

私がこの手記を書くきっかけとなったのは、入院中に病院のデイルームのテーブルにはり出してあった応募の知らせです。

今回の入院は、転倒して頭を打ち脳内出血をしたためです。

幸いにも、後遺症もなく安心しました。この病院に一番最初入院したのは9年前の食道ガンの時でした。手術も無事に終わり、その後も通院しながら元気に生活していました。

ところがある時、学生時代の友人2人が同時にガンになり、私も軽い気持で検査を受けたら乳ガンが見つかりました。思えば、友人達とは中学1年の時からの、もう半世紀の付き合いです。「私達3人一緒にガンになるなんて本当に仲が良すぎるわね」と笑ってしまいました。もし1人だったら落ちこんでしまう事も、3人一緒だったので前向きに病氣と向き合う事が出来ました。そして2011年東北大震災のあった年に、まだ横浜でも強い余震の残る3月17日に私が手術、その後5月と7月に2人の友人がそれぞれ東京と横須賀で手術しました。今は3人とも元気で仕事も復帰し、以前の様に一緒に旅行に行ったりしています。抗ガン治療で苦しい時期もありました。でもいつも病院のスタッフの暖かい言葉に支えられました。

それでも苦しくてつらい時、私はいつもこう思うのです。「今、こうして苦しんでいるのが娘でなくて私で良かった…」と。親は子供が病氣で苦しん

でいたら「私が代わってやりたい」と思うはずです。ですから私が苦しくても、これは子供の身代わりになっているのだと思うと耐える事ができました。

これから先もガン転移があっても、信頼できる病院のスタッフを信じて必ず治していける自信があります。入院中同室の患者さん達とのベッドで寝ながら、お互いのカーテン越しの会話はどれも心にしみる忘れられない話がありました。

病気になって苦しいのはもちろんですが、健康でいたら気が付かないでいた事が沢山ありありました。病気と向き合うのは決して一人では出来ません。家族、友人、そして病院のスタッフの暖かさがなかったら、心身共に元気になれないのです。今、私は全ての人達に感謝しています。

ありがとうございました。

